

群 教 セ	G09 - 03
	令3.278集
	英語 - 高

日常的な話題について理由や根拠とともに 意見や気持ちを英語で表現できる生徒の育成

—— 1人1台端末を活用し、生徒自らが用いた表現を
振り返り、改善していく活動を通して——

特別研修員 佐藤 千尋

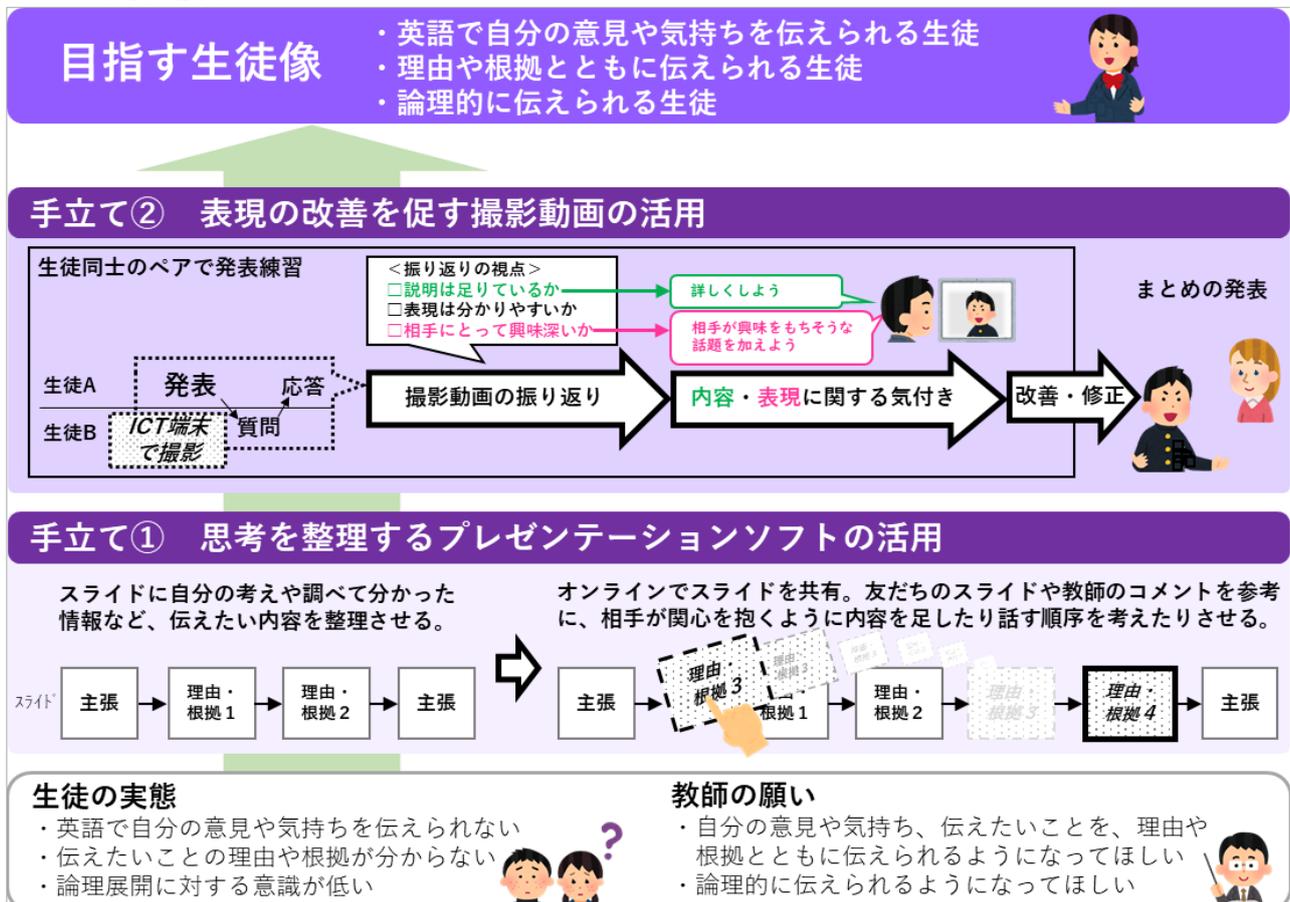
I 研究テーマ設定の理由

「高等学校学習指導要領」（平成30年告示）における外国語科の目標では、情報や考えなどを適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することが示されている。また、身近な出来事や家庭生活などの日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを、理由や根拠とともに伝える活動を通して、このような資質・能力を育成することが示されている。

生徒の実態として、英語に対して苦手意識があるものの、授業内のコミュニケーション活動やパフォーマンステストには意欲的に取り組む姿が見られる。しかし、伝えたいことに対して、なぜそう思うのかといった理由や根拠が曖昧だったり、話す順序を整理して伝えようという意識が低かったりするため、自分の意見や気持ちを分かりやすく相手に伝えることに課題がある。そこで、1人1台のICT端末を活用して、自分の意見や気持ちが伝わりやすくなるような構成を考える活動と、実際に相手に対して発表の様子を撮影し、それを振り返る活動を行う。これらの活動によって、生徒に自分が用いた表現に関する気付きと改善を促し、理由や根拠を明らかにしながら意見や気持ちを相手に分かりやすく伝えることができるようにすることを目指し、上記のテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

自分の意見や気持ちを理由や根拠とともに相手に分かりやすく伝えられるようにするためには、生徒が伝えたい内容を整理する機会を設定し、論理的な構成を意識して伝えられるようにする必要がある。また、生徒自身が、実際に自分が話した内容や表現を客観的に振り返り、改善・修正を図ることのできる機会を設定し、内容を詳しくしたり、表現を簡潔にしたりすることによって、相手に伝わりやすくする必要がある。そこで、以下の二つの手立てを用いる。

手立て1 思考を整理するプレゼンテーションソフトの活用

ICT 端末のプレゼンテーションソフトを用いて、スライドに伝えたい内容を整理させる。自分の意見や気持ちを述べる際には、その理由や根拠を示したり、抽象から具体への論理展開を考えたりすることで相手に関心を抱かせる発表ができるようにする。

手立て2 表現の改善を促す撮影動画の活用

発表と、それに続くやり取りを ICT 端末を用いて撮影し、自分が話した内容や表現について振り返りをさせる。内容が不足していたり、表現が理解しづらかったりしていることに生徒自身が気づき、改善・修正できるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- ICT 端末のプレゼンテーションソフトを用いることによって、生徒は自分が伝えたいことをスライドに整理し、論理的に伝えられるようになった。以前は話す順序をあまり意識していなかった生徒も、論理構成を考えることができるようになった。「例を挙げたり、自分がそう思う理由を具体的に言ったりすることができた」というアンケートの記述回答からも、自分の意見や気持ちを理由や根拠とともに伝えることができるようになった生徒の姿があった。
- アンケートでは、ICT 端末で自分の発表を撮影した動画を見ることで、自分が話す内容や表現を客観的に振り返り、改善・修正できたと答えた生徒が 81%いた。相手の立場になって自分の発表を振り返ることによって、説明が足りないことや別の表現を用いた方がよいことに気づき、内容や表現を改善・修正しようという意識がはたらいたと考えられる。後日 ALT に発表をした際には、伝えたいトピックに関連する歴史的な背景を付け足したり、一方的な説明にならないよう話の途中で問いかけの表現を用いたりして、相手がより興味深く感じるような工夫をしている生徒もいた。このことから、撮影動画での振り返りが、話す内容や表現を継続的に見直すことにつながったと言える。
- 撮影動画で自分を客観的に振り返り、生徒は声の大きさ、話す速度、アイコンタクトなど、発表を行う態度に関しても改善点があることに気づくことができ、聞き手の立場になって、より分かりやすい話し方を意識しながら話すことができるようになった。

2 課題

- 撮影動画で振り返りをする際に、声の大きさやアイコンタクト、ジェスチャーなど、発表を行う態度について着目している生徒がいたが、発表の内容や表現を改善するためには、内容や表現に焦点を絞って振り返りをさせる必要がある。そのような振り返りの視点を明確に生徒に指示したり、振り返りシートに明記させたりすることによって、生徒は発表する内容の質を高めるための振り返りと改善・修正を行うことができるようになると思われる。
- より分かりやすく意見や気持ちを相手に伝えられるようになるためには、発表の後の質疑応答や会話などのやり取りを継続させていく必要がある。発表の中で理由が足りていなかったり、表現が分かりづらかったりした場合でも、発表に続く質疑応答の中で補足説明をしたり、分かりやすい表現に言い換えたりして、相手とやり取りを続けていくことにより、伝えたい内容をより詳しく伝えることができるようになると思われる。

実践例

1 単元名 「Lesson 5 “The History of Ice Cream”」 (第1学年・2学期)

2 本単元について

第1時の導入部分で、ALTが母国であるニュージーランドでよく食べていたアイスクリームや、その他の身近な食べ物を紹介する。それに対して、生徒1人1人が、ALTにおすすめしたい日本の食べ物について考え、伝えられるようにする。さらに、本単元で生徒は、アイスクリームの起源や、現代の形に至るまでの歴史的経緯を学ぶ。この学びを通して、生徒は、どのような情報を加えたらALTが興味を抱いてくれるだろうか、どのような表現を使えば分かりやすく伝えられるだろうかという思いになっていく。このことから、本単元を学習する価値は大きい。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	ア	世界中の様々なアイスクリームやその歴史に興味をもち、ALTにおすすめしたい食べ物について、調べて分かったことや好きな理由を意欲的に伝えることができるようにする。 (コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
	イ	ALTにおすすめしたい食べ物について、調べて分かったことや好きな理由を分かりやすく表現できるようにする。 (外国語表現の能力)
	ウ	アイスクリームの起源や世界中に広まる過程、および現在のようになった経緯を理解することができるようにする。 (外国語理解の能力)
	エ	SV0 to不定詞、It is～(for...)to不定詞、現在分詞・過去分詞の後置修飾の意味や用法を理解できるようにする。 (言語や文化についての知識・理解)
評価 規準	(1) 世界中の様々なアイスクリームやその歴史に興味をもち、ALTにおすすめしたい食べ物について、調べて分かったことや好きな理由を意欲的に伝えようとしている。 (2) ALTにおすすめしたい食べ物について、調べて分かったことや好きな理由を分かりやすく表現している。 (3) アイスクリームの起源や世界中に広まる過程、および現在のようになった経緯を理解している。 (4) SV0 to不定詞、It is～(for...)to不定詞、現在分詞・過去分詞の後置修飾の意味や用法を理解している。	
過程	時間	主な学習活動
つかい	第1時	・ALTが母国のアイスクリームやおすすめの食べ物を紹介するのを聞き、自分がALTにおすすめしたい身近な食べ物を考える。
進捗する	第2時	・アイスクリームの起源を理解する。
	第3時	・アイスクリームが現在のようになった歴史を理解する。
	第4時	・ALTにおすすめしたい食べ物に関する個人的な経験や、それが好きな理由を考える。
	第5時	・ALTにおすすめしたい食べ物に関する質問に答えられるようにする。
まとめる	第6時	・ALTにおすすめしたい食べ物について、ペアで発表、質問、応答する様子を撮影して振り返る。
	第7時	・ALTに自分のおすすめの食べ物について伝える。(生徒1人ずつ)
	第8時	・ALTに自分のおすすめの食べ物について伝える。(生徒1人ずつ)

3 具体化した手立てについて

教科書題材に関連して、生徒は自分がALTにおすすめしたい身近な食べ物を分かりやすく伝えることを目標とした。そこで、全8時間計画の第4時及び第6時において以下の手立てを具体化した。

手立て1 ALTにおすすめしたい身近な食べ物を分かりやすく伝えることができるようにするための思考を整理するプレゼンテーションソフトの活用

ICT端末のプレゼンテーションソフトを用いて、自分がALTにおすすめしたい身近な食べ物について伝えたい内容をスライドに整理させる。おすすめの食べ物を紹介する際には、その起源や歴史、種類、味などの具体例、個人的な体験談など、それをおすすめする理由や根拠を示したり、抽象から具体への論理展開を考えたりすることで相手に関心を抱かせる発表ができるようになる。

手立て2 ALTにおすすめしたい身近な食べ物を分かりやすく伝えることができるようにするための表現の改善を促す撮影動画の活用

ALTにおすすめしたい身近な食べ物に関する発表とそれに続くやり取りをICT端末を用いて撮影し、自分が話した内容や表現について振り返りをさせる。内容が不足していたり、表現が理解しづらかったりしていることに生徒自身が気づき、改善・修正できるようにする。

4 授業の実際

(1) 思考を整理するプレゼンテーションソフトの活用

第1時に ALT が、母国のニュージーランドで人気のアイスクリームや、その他の身近な食べ物について、画像とともに生徒に紹介した。使用食材や、味、売られている場所や、おすすめの食べ方など、後に生徒が発表の参考にできそうな内容の紹介をした。また、単元の終末では、生徒が ALT に身近な食べ物を英語で紹介する活動を行うことを伝えた。紹介する食べ物は、主食、デザート、菓子など、限定はせずに本当に伝えたい、食べてもらいたいもの考えるように伝えた。

第4時では、ALT に「この食べ物をおすすめしたい」という主張に加えて、その食べ物の種類や味などの具体例、個人的な体験談などといった、その食べ物をおすすめする理由や根拠を明らかにさせた。そして、それらを話す順序を ICT 端末のプレゼンテーションソフトを用いて整理させた。その際、ALT に関心を抱いてもらえるような論理構成を意識するよう伝えた。ICT 端末を用いて話す内容ごとにスライドを作り、並べることで、話す順序が視覚的に分かり、構成を考えやすくなった。さらに、スライドをオンラインで共有して友だちのスライドや教師のコメントを参考にすることで新たな視点に気付き、話す内容を再構成する生徒もいた。具体的には、その食べ物が安いという事実や、その食べ物の名前の由来を足すことによって、ALT がその食べ物を食べてみたくなるような工夫を加えていた（図1）。

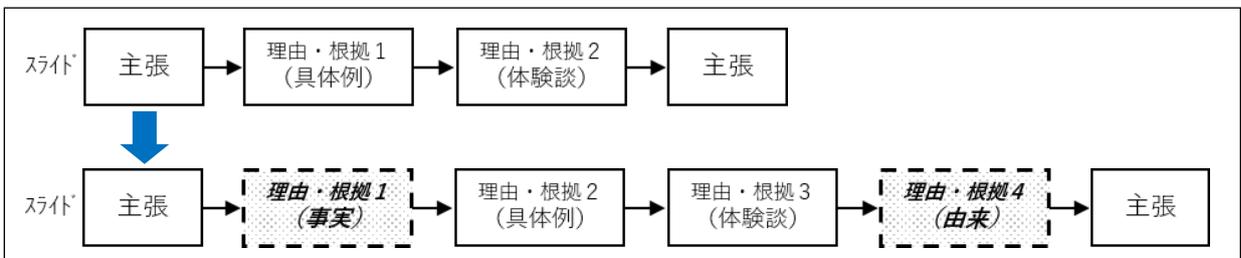


図1 ICT端末のプレゼンテーションソフトを用いて伝えたい内容を整理したスライドの例

(2) 表現の改善を促す撮影動画の活用

第6時において、ALT におすすめしたい食べ物について発表練習をさせた。まず、ICT 端末のプレゼンテーションソフトを用いて整理した論理構成に沿って、各自発表のリハーサルをさせた（10分間）。その後、図2のように生徒同士で発表練習を行った（25分間）。1人の生徒（生徒A）が ICT 端末でスライドを提示しながら発表し、その後、ペアの生徒（生徒B）が質問を二つした。生徒Aが質問に回答するまでの一連の流れを生徒Bが ICT 端末で撮影した（図3）。その動画を見て、生徒Aは自分の話した内容や表現について振り返ったり、質問に分かりやすく答えられているかを振り返ったりして、気付いたことを振り返りシートに記入した（図4）。生徒Aと生徒Bは役割を交替し、同様の流れを繰り返した。その際、自分の動画を振り返って気付いたことを踏まえて、改善・修正を図るよう伝えた。最後に、授業のまとめとして無作為に選ばれた代表生徒が教室の前に出てきて発表し、クラスメイトからの質問に答えた。代表生徒の発表を見たクラスメイトからは、具体例が豊富で面白く感じた点などを参考にしたいという声が聞かれた。

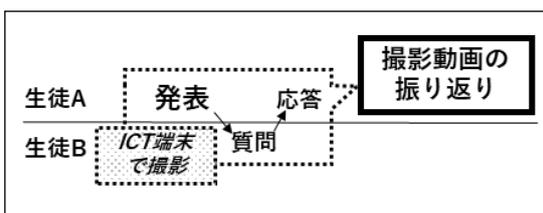


図2 ペアで発表を練習する活動の流れ



図3 発表を撮影する様子



図4 動画を振り返る様子

(3) 単元の終末における ALT に向けての発表

第7時及び第8時において、まとめとして ALT に生徒 1 人 1 人がおすすめの食べ物を発表した(図5)。第6時での発表に対して、ALT への発表の際には、関心を抱きそうな寿司の歴史に関する説明を付け加えていたり、更に興味をもってもらえるように話の途中で ALT 自身の好きな寿司を尋ねる表現を用いたりする生徒もいた(図6)。撮影動画の振り返りから自分がおすすめする食べ物を ALT がより興味深く感じ、食べてみたいと思うようにしたいという意識がはたらいたことにより、その後の改善・修正がなされた。



図5 まとめとしてALTに発表する

ALT は、生徒の発表内容に合わせて質問をした。ALT が生徒の予想していない質問をした時でも、第6時にペアで質疑応答の練習を繰り返し行っていたため、落ち着いて聞き取り、適切に回答することができた。



図6 自分の撮影動画を振り返り、内容や表現を改善・修正した生徒の発表内容

5 考察

(1) 思考を整理するプレゼンテーションソフトの活用

ICT 端末のプレゼンテーションソフトを用いて伝えたい内容を整理する活動においては、1人1台の ICT 端末を使うことによって、どの生徒も容易に資料収集ができ、伝えたい内容をスライドにまとめることができた。また、ICT 端末を用いること自体が生徒の意欲を引き出した。さらに、オンラインで共有した他の生徒のスライドを参考に、自分の話す内容を再構成することもできた。このようなことから、ICT 端末のプレゼンテーションソフトを活用して思考を整理する活動は、理由や根拠が曖昧だったり、話す順序に対する意識が低かったりして、自分の考えや気持ちを相手に分かりやすく伝えられなかった生徒に対して大きな効果があったと考えられる。

(2) 表現の改善を促す撮影動画の活用

ICT 端末で自分の発表を撮影することに対して、初めは不慣れな生徒が多かった。発表の声は小さく、相手の方を見ない生徒が多かった。しかし、このような自分の姿を撮影した動画で客観的に確認し、自分自身の発表の課題を見付けることができた。そして、発表と撮影した動画での振り返りを繰り返していくうちに自信をつけ、相手に気持ちが伝わるように改善したいという意欲が生徒から見られるようになった。しかし、改善の視点が声の大きさやジェスチャーといった発表の態度面に留まった生徒がいた。そのような視点で振り返ることとは別に、発表の内容や表現といった視点で振り返る機会を設定したり、そのような振り返りの視点を明記したワークシートを活用したりすることで、生徒は目的をもって自らの発表を振り返り、改善していくことができるようになると思われる。